



右／edge 黒御影石 2005年
 左下／赤い石 赤御影石 2006年
 右下／大地のかけら 御影石 2006年※
 左／展示風景※

※印 撮影：松隈健太郎



「サブトラクション - 立ち現れるかたちの力 -」

脇本厚司（美術史家）

本展のタイトルにもなっている「やわらかな硬さ」は、彫刻家・片山健の作品表現の本質を見事に表している。「edge」を始めとする3点の作品に出逢い、見る者の心にはコソバユイアンビバレンツがもたらされる。

作為的な無作為と無作為的な作為が交錯し、それぞれの作品に付与された複数の混合した性格は、一義的な解釈やあらかじめ用意された感情などは惹起させない。見る者は自分の中で絡み合う二律背反の所在を突き止めるため、立ち現れた存在に手を触れようとする衝動にさえ駆られるであろう。

黒御影石の「edge」では、マットな質感に磨き上げられた表面と、研ぎ澄まされた鋭利なエッジ、そして作為的に穿たれた粗いマチュエールの岩肌が共存する。そのマットな表面から放たれる反射光は鈍いが、鋭い切れ味を持つ。

また、むき出しの荒々しく削り落とされた石肌と、磨きのかかった表面、両端にエッジを持つ「赤い石」（赤御影石）。磨かれた表面の微かな起伏は、血が通い脈打つ肉感を漂わせる。片山と素材との対話によって立ち現れたかたちに見入ると、表面が呼吸して波打つようにさえ感じられる。

「大地の破片」（御影石）は、確かなボリュームを伴いつつも、全面に施された磨きと、甲羅型に形成された石の縁にめぐらされたエッジにより、今にも動きだしそうな軽妙さがもたらされ、浮遊する可能性さえも思い起こさせる。それは、飛来してきた未知の生命体のようでもあり、大地から産み落とされた生命の原石のようでもある。

これらの作品に共通して見られる「エッジ」は、片山氏の石彫制作におけるキーワードである。石という存在は、荒く、硬く、冷たく、重いというイメージを与えるのが常である。しかしそうしたイメージを、「磨き」と「削り」によって乗り越え、突き崩し、自己の表現へと到達する。氏の中でイメージされる形態が、石の持つ鋭さを捉え、エッジとなって現れているといえよう。軽妙に切り裂く剣でもあり、猛々しく打ち下ろされる鈍器でもあり、世界に突き刺さる槍でもあるような妙味がエッジとともに表現される。

2003年に東京藝術大学・大学美術館主席買い上げ賞を獲得した『張力』。その黒御影石に漲る緊張感。そこには、あるべき存在を覆っているヴェール、剥ぎ続けて残った最後の薄皮1枚を、自分の手で剥ぎ取ろうとする積極的な意志が込められている。氏の表現は、常にこの絶えざる好奇的試みを軸にして展開され、こうして削り出され露になる存在は、繊細なダイナミズムと美しい重みを携えている。

こうした表現は、それまで手がけていた塑像から、石彫による抽象表現へ取り組むことで、それまでのプラスの世界から、マイナスの世界へと大きな転換的移行を図ったことが重要な契機となったと言える。

自己に沈潜している形態の可能性を実現化し発露させる、その手段としての抽象彫刻。象（かたち）を抽き出す（削り出す）行為を選び取り、素材である石と交わされる対話を吟味しつつ進められる制作によって、形態の可能性が素直に開かれる様をわれわれは目にすることができる。削り出すというマイナスの行為、厳密なサブトラクション（引き算）から、豊かな造形表現がもたらされるのである。

片山氏の現在進行形の表現手段である石彫。それぞれ個性の異なる石（素材）との対話からなされるコラボレーションは、現時点で氏が表現したい形態イメージに適った方法であると言う。今後どのような手段に移行したとしても、形態実現の可能性は常に開かれ実践され続けるだろう。今後の展開が楽しみである。個人的には、片山氏の石彫作品によってランドスケープ・デザインがなされた庭を目にしてみたい。